

次号の特集テーマは、「生涯学習」です。生涯教育・生涯学習は、一九六五年に開催されたユネスコ成人教育推進会議においてフランスの成人教育者ポール・ラングランが提唱した生涯教育論によって注目されるようになりました。ラングランは、第二次世界大戦中のレジスタンス運動に参加した経験から、学校教育を通じて形成される人々の従順さを批判し、成人期の学習によって得られる自律性の重要さを説きました。彼がまとめたユネスコのワーキングペーパー「永続教育 (Education permanente)」は、生涯にわたる教育機会の提供と生活場面における教育の調和を示しました。ユネスコの生涯教育論は教育の場を学校に限定せず、生活のさまざまな場面で行われる教育・学習を視野に入れたもので、それに応じて一九七〇年には経済協力開発機構 (OECD) が生涯教育の戦略としてリカレント教育の考え方を打ち出しました。

そもそもリカレント教育とは、教育を労働や余暇や隠退生活などの個人の生涯にわたる諸活動と交錯させながら分散することを意味していました。これまで、子どもの時に学校へ通い、学校卒業後には労働に従事し、ある程度の年齢で引退して余暇を中心とした生活を送ることを前提としてきましたが、こうしたライフサイクルを見直す機会を示したのです。つまり、労働の時期を一時的であっても中断して新たに教育を受け、その教育内容を活かして仕事を継続し、場合によってはある期間を余暇として過ごしながら、教育・労働・余暇を組み合わせることを可能とする教育論でした。実際には、そうしたリカレント教育を制度化できた国は限定的でしたが、多様な教育機会の提供の重要性は広く浸透し、多くの国で生涯学習振興のための施策が導入されています。

ここで日本の状況を見渡せば、二〇一〇年代後半以降やや異なる文脈でリカレント教育とリスキリングが政策課題と

なっています。その主目的は減少した企業内訓練に代わる職場外での「学び直し」による職業能力の向上で、正規の教育機関と民間サービスによる教育提供が前提となっている点特徴です。また、こうした学習継続の必要性を若者たちが自ら内在化し、同時に高等教育において「実社会に役立つ内容」を求めたり、大学は実務家教員を増やすといった捉え方につながったりしています。グローバル競争や個人の責任が問われる傾向が強まるにつれ（経済的）生産性」向上が重視されるようになり、生涯学習論やリカレント教育論において元来重視されていた人間的または文化的な豊かさを志向する教養教育や、教育機会の格差是正といった目的は存在感を薄めていきました。ただし、この傾向は日本に限定されたものではなく、通学できなかった人に対する義務教育を「セカンドチャンス」として提供する諸外国の対応を含めて、程度の差こそあれ国際的には同様です。

この数年でみられた学校閉鎖やテクノロジを活用した教育は、世界共通の経験でしたが、学習者の生涯にわたり影響を与えることになるでしょう。コロナ禍の経験から、学校は多様な機能を持つことが世界中で理解され、通学できなかった子どもたちは長期にわたり悪影響を受けることが国際調査でも明らかになっています。同時に、失業者として生活に困窮した、あるいは人生の優先順位を見直した保護者も多く、より新しいスキルを獲得するためにオンライン教育に投資する人も増えました。また、そこにビジネスチャンスを見出す民間教育サービスも広がりました。円安や「低い生産性」を抱える今後の日本社会のために留学生を獲得する動きも強まり、高度なスキルを持つ者が常に求められるようになると、競争は加熱することが考えられます。そのとき、競争から降りる人たちが増えるのであれば、日本は分断された不安定な社会になるかもしれません。加えて、「二〇〇七年に生まれた子供は、一〇七歳まで生きる確率が五〇%ある」とまでいわれる長寿化の影響もはかり知れません。六〇〜七〇歳では、かつてのライフサイクルのように退職後には余暇のみで過ごすことが難しくなり、それなりの年齢になっても生活のために学ぶというプレッシャーが、これまで以上に大きくなると考えられます。

「ゆりかごから墓場まで」を射程に捉える生涯教育・生涯学習に関連する課題は、以上で素描したのものには留まらな

いでしよう。皆様からの積極的な投稿をお待ちしております。なお、査読の結果、特集論文ではなく自由投稿論文のカタログでの掲載とする場合もありますので予めご了承ください。

●『教育学年報』投稿要領

1 発行予定 二〇二四年八月

オープン・レビューによる査読の上、編集委員会で採択の可否を決定します。

2 募集原稿の文字数

【タイプ① 次号テーマ「生涯学習」に沿う原著論文】

一六〇〇〇字以内。原稿はA四判（横置き）で縦書き、一頁あたり三〇字×四〇行で作成し、図表・注を含めて、一四枚以内を一六〇〇〇字とみなします。なお、査読の結果、タイプ②の原著論文、あるいは研究ノートとして掲載することがあります。

【タイプ② 自由テーマの原著論文】

一六〇〇〇字以内。原稿はA四判（横置き）で縦書き、一頁あたり三〇字×四〇行で作成し、図表・注を含めて、一四枚以内を一六〇〇〇字とみなします。なお、査読の結果、研究ノートとして掲載することがあります。

【タイプ③ 研究動向紹介・書評・エッセイなど】

一〇〇〇〇字以内（超える場合は応相談）。原稿はA四判（横置き）で縦書き、一頁あたり三〇字×四〇行で作成し、図表・注を含めて、九枚以内を一〇〇〇〇字とみなします。

3 原稿の形式と送付先

① 「MS Word」と「PDF」の二種類（同内容）の電子データで提出してください。

② 原稿とは別に、日本語による概要（四〇〇字程度）を付してください。掲載が決定した場合、別途、英文タイトル

ルの提出をお願いします。

- ③ 原稿は、論文題目、原稿の種類、投稿者の氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスをお書き添えの上、世織書房メールアドレス〈seori@nifty.com〉へお送りください。メールでのご提出が難しい場合は、世織書房（〇四五―三一七―三一七六）までお電話ください。

4 投稿内容は未刊のものに限りませんが、既発表の論文が部分的に組み込まれていてもかまいません。その場合は重複部分を明示し、投稿論文とあわせて参考論文をお送りください。

5 投稿論文は各号の採択が判明するまで、他の媒体へ重ねて投稿しないでください。

6 締め切り 二〇二四年二月二十八日（必着）

7 問い合わせ先 世織書房メールアドレス〈seori@nifty.com〉